

# 〈生〉の社会学 — その若干の考察

藤村正之 上智大学総合人間科学部教授



## 1. 「〈生〉とグローバル」の21世紀

20世紀を生きている間、私たちはどんな21世紀を思い描いていたのだったろうか。何を考えていたのか思い出せないまま、21世紀も最初の四半世紀が着々と過ぎようとしている。貧困や格差、不信や分断、内戦やテロ。災害やリスク。私たちが予想もしなかったような言葉が充満する世界を今私たちは生きている。20世紀に経験した高度経済成長期のような時期が歴史の一瞬間として夢のようなおとぎ話だったのか、あるいは21世紀の初頭に私たちが見ている世界はたまたまの揺り戻しとしての悪夢のようなもので再び未来に向けた前進が始まるのか。私たちは羅針盤を持ちえないまま、21世紀に立ちすくんでいる。

21世紀を生きる私たちの状況をしめすキーワードを、社会的な関心を持ちつつ、「〈生〉とグローバル」としてみよう。私たちが生きている空間が、いまや国家を超え

て世界・地球にいたるグローバル化のただ中にあることは言うまでもない。他方、グローバルな地球上のどこかでおこった事象が、明日の私たちの日常的な生き方に影響を与えるということも珍しくなくなっている。それは世界の政治経済状況や大災害であったり、新種の伝染病やスポーツ・イベントであったりする。人々の〈生〉とグローバルが直結する時代を私たちは生きている。

そして、そのようなグローバル化でむき出しになった私たちの〈生〉とは、環境問題や核兵器による生命体存亡の危機に直面する、いわば人類として普遍的な〈生〉であると同時に、時代と状況と関係に規定された個別・具体的な〈生〉である。ダイバーシティに見られる個性の尊重、他方で自己決定・自己責任のような自己への内閉。グローバル化する中においても、具体的な人々の個々の生き方への関心と重みが高まってきている。それらは、現代社会が、〈生〉へ向かう求心性とグローバルに向かう

遠心性という2つのベクトルに引き裂かれつつ交錯する時代であることの証左でもある。

19世紀にそれ自身の〈生〉を受けた社会学は、「個人と社会」を対比してとらえようとする問題関心の中で成長してきた。20世紀半ばにおいて、社会学の理論的視点は学問的整備とともに分析的な方向に向かい、個々人の基本的な営みとして織り成される「行為」と社会を多様な要因の連動・連鎖と見る「システム」に着目し、「個人と社会」から「行為とシステム」へと学問的関心を変容させてきた。そして、それを引継ぐ21世紀において、「行為とシステム」という分析的視点を保ちつつも、そこに具体性と現実の変容を盛り込んだ「〈生〉とグローバル」という視点が求められるようになってきているのである。個人—行為—〈生〉というミクロな系列と、社会—システム—グローバルというマクロな系列。両系列の接点にある「〈生〉とグローバル」という視点は21世紀社会の動向であるとともに、21世紀社会学が挑戦すべき問題設定でもある。



## 2. 〈生〉 = 〈生命〉 + 〈生活〉 + 〈生涯〉

それでは、21世紀社会学が挑戦すべき問

題設定のひとつとして、社会学は〈生〉をどのようにとらえていくことができるのだろうか。[藤村, 2008, 264-266]

人間の〈生〉というものが支えられ、構成される要素として、社会学はこれまで〈生命〉〈生活〉〈生涯〉を研究対象としてきたと考えることができる。すなわち、[〈生〉 = 〈生命〉 + 〈生活〉 + 〈生涯〉]ということもできる。実は、これらは英語の言葉lifeの翻訳語として訳される言葉でもある。すなわち、〈生〉をしめすlifeは〈生命〉でもあり、〈生活〉でもあり、そして、〈生涯〉でもある。

3つの構成要素の関係は次のように理解できる。〈生〉とは、ひとまず、その言葉通り、私たちが「今、ここで生きていること」と言える。しかし、その「今」は、瞬間瞬間確実に存在し、それが連続線上に並んでいく一方で、瞬間瞬間消えていき、個々人の〈生〉は決して永遠には続かない。それは、最終的に〈死〉という現象によって時間的に遮られ、そこに〈生と死〉という対概念が成立する。そのような〈生と死〉という対概念の成立が、私たちに2つのことを理解させていく。ひとつは、ひとりひとりの個々人の生から死までの時間域が〈生涯〉として成立することであり、もうひとつは、生から死までの個々人の存在を物理

的に支えるのが〈生命〉としての身体であるということである。〈死〉によって、〈生命〉と〈生涯〉は終わりをつげる。そして、その区切られた時間域の中を〈生命〉を通じて描かれる、瞬間瞬間のいわばスナップショットが〈生活〉だと言えるであろう。〈生〉とは、身体の活動としての〈生命〉を媒体に、日々の活動経験（〈生活〉）と時間経験（〈生涯〉）を私たちが達成していく軌跡であると考えられる。

〈生〉を構成する3つの要素について、もう少し考えてみよう。

第1に、〈生命〉とは、身体をめぐる物理的生存とその活動のことをさすと考えてよい。「人間的自然 (human nature)」という言い方があるように、私たちは自然的存在として生きている。それは、具体的には生殖を通じた世代の再生産と、労働や消費を通じた日々の再生産によって保たれている。〈生と死〉がセットとなって議論される場合の〈生〉は、主にこの〈生命〉が主題となる。病院死の増加や脳死の社会的判定という事象などによって〈死〉(death)や「死にゆくこと (dying)」への、また、生命科学の進展による生命倫理や「人間であること」への社会的関心は高まってきている。

第2に、〈生活〉はもっとも多義的に使われる概念だが、一時点や一定の時間域を区

切って着目される、個々人や家族などの日常的行為やその集積である。生活費・衣食住といった諸条件や、仕事・家事や余暇などの諸活動によって〈生活〉は成立し、1日・1週間・1か月・1年という累積的・周期的な時間幅のリズムをともないうちながら構成されていく。そこでは、生存レベルの問題（最低生活）や他者との比較（人並み）が関心を持たれたりする。〈生活〉はそれを成り立たせる諸資源の獲得や使用において、他者の行為と交錯せざるをえず、そこにおいて、諸集団・諸組織やネットワークなど社会との関連を有するものとなっていく。

第3に、〈生涯〉は、生まれてから死ぬまでという範囲でしめされる、lifeの中で時間性・歴史性を含んだ概念である。人は、社会的認識と先行世代の〈死〉を経験することにより、自分が不死ではなく、自らの〈生命〉に終わりのあることを知る。また、人は記憶や回想を通じて、自らが歩んできた道程をふりかえり、過去の経験を意味づけ、それを改編していく。このように、誕生から死にいたるまでの諸経験を整序していく〈生涯〉への関心は、人々の一生の時間が長寿化によって延長され、さまざまな転機やタイミングの機微を含みこむことにより、いっそう深く理解されるものになってきたといえる。

〈生〉を構成するものとしての〈生命〉〈生活〉〈生涯〉。核や環境という問題が私たちの〈生命〉を、そして、市場の脅威が私たちの〈生活〉をおびやかす、高齢化による長寿が実現したにもかかわらず家族の変容など私たちの〈生涯〉は予定調和的なものではなくなってきている。そのような時代たる現代において、社会学は研究視点の方向性のひとつとして、〈生〉への問いにたどりついたと言えるであろう。そこには、社会学が研究対象としてきた〈生命〉〈生活〉〈生涯〉を統括するような視点が〈生〉として求められつつあること、そして、それを対象化されたものとしてだけではなく、本人によって「生きられている〈生〉」として、当事者視点のもとに理解することが求められつつあることも関わっている。

以上のように、〈生命〉〈生活〉〈生涯〉の3つの要素を織り合せながら、私たちはひとりひとりの〈生〉を生きていると社会的には整理することができる。

### ◆ 3. 東日本大震災で経験された〈生命〉〈生活〉〈生涯〉

歴史の転換点だったということは一定の時間が経過してからわかるのだが、私たちが2011年をそのような年として見るこ

に多くの方が同意されるであろう。[藤村, 2011, 2, 5-7]

2011年3月11日午後2時46分、東北太平洋沖に巨大地震が発生した。その後生じた巨大津波とあいまった東日本大震災は、戦後最大の死者・行方不明者を出す大災害となった。この大震災において、実際には次の4つのことが時間的に連動して起き、それぞれ個別に問題の質や広がりがありつつ、それが一気に重なるように起こったと考えられる。その4つとは、地震被害、津波被害、原発被害、そして、東北・関東だけでなく全国で経験した電力不足である。時間が経過し、各々の被害の重なりや違いを意識したうえで、問題点の認識や対策の検討がなされてきている。それらの被害に遭遇した私たちは、その被害の直接の当事者の人たちも、また、同じ時代・同じ社会を生きる日本人たちにとっても、社会のあり方やひとりひとりの生き方の問い直しを迫るものとして、その被害を感じている。

この大震災によってひとりひとりの〈生〉におよぼされた事態は、先に〈生〉の3つの要素とされた〈生命〉〈生活〉〈生涯〉の個々の側面において、かつその順に課題として浮上し、解決が求められてきた。その枠組を確認する意味で3つを順に考察してみよう。

災害によって真っ先に問題となったのは、

言うまでもなく人々の〈生命〉である。津波によって、その日の朝、その日の昼まで、普通に生きていた人たちの〈生命〉が一瞬のうちに奪われていった。しかも、津波の濁流に飲み込まれてわずか数センチだけ手を建物にかけて生き残ることができたり、あるいは追いかけてくる津波から数秒の差で屋上や高台に逃げ切れたなど、わずかなところで人の生き死にが決まっていった。そのような生死を分ける瞬間が、どの人々にもあったと想定される。その瞬間において、必ずしも誰かが助けてくれる保証があるわけではない。助けに回るはずの人たちも生死の瀬戸際に立たされているのだから。自分の生命は瞬間・瞬間自分自身で守らなければならないということが、この津波災害でいっそう明らかになったと言える。自らの判断が問われ、そのための事前の学習やその瞬間での情報入手が重要となってくる。他方で、それが必ずしもかなわないことの多い高齢者・障害者・子どもたちへの対応が課題ともなってくる。

次に、命からがら逃げ切り、〈生命〉を保ちえたとして、そこから始まるのが災害後の〈生活〉の維持・再建である。まずは避難所にたどりつけ、居場所が確保できるのかどうか、さらにそこでの衣食の生活が確保できるのかどうか。避難所での心身のス

トレスや生活不活発病で亡くなる高齢者もいる。高齢者などでは、〈生活〉が維持できない事態は〈生命〉を維持できない事態にいたる。次に仮設住宅に場所を変えての生活があり、やがて復興住宅などに居を構えての新たな生活の開始となっていく。その過程において、初期の1日24時間をどう生活していくのかの段階があり、それが軌道に乗れば、次は雇用を中心とする経済生活の立て直し、家族や近隣の人間関係の再構築が必要になっていく。個々人や世帯の〈生活〉の再建と共に、それを支えるであろう地域の再建も求められる。被災地の再建に関して新しい方法や工夫が必要な一方、地元で長らく生活してきた人々にとって、震災前も震災後も継続される生活の、身体に染みこんだ文化や習慣との整合性をどう調整していくのが課題となっていく。

災害の難を逃れて〈生命〉を保ち、〈生活〉の再建が達成されていく過程で、次第に〈生涯〉にかかわる事象が浮上してくる。多くの人々が自分自身の生き死にの瞬間に関わる経験をしており、その体験を自らの人生の過程において落ち着いて位置づけられるまでには一定の時間が必要であろう。多くの人たちが、災害死の難を逃れたことを、「自分が生かされている」という受動的な摂理として声にし、死生観や社会観

の変容を語る。また同時に、自らの〈生涯〉の伴走者であった家族・親族・友人などを理不尽な形で亡くした経験を多くの人々が有している。自分は生き、なぜ彼・彼女は死んだのか。この経験と思いを人はおそらく〈生涯〉かかえて生きなければならない。さらには、死にいたる事態の経験によっては、生き残ったものに罪悪感が感じられるというサバイバーズ・ギルトの心理状況にさいなまれるものもいるであろう。今回の経験をひとりひとりの避難の指針としても後世に向けてしっかり伝承していくことが数多くの人々の死と生き残ったものの瀬戸際の体験を意義づけることになろう。そして、今回の事態の不可逆の事態となりつつある原発による放射線被害の長期化は、自らの土地や家に戻れるかどうか、〈生涯〉をかけた、さらには世代をかけた問題となる様相をしめしている。

大災害の発生により、私たちは〈生命〉の危険にさらされ、その難を逃れたとして、避難から再建にいたる〈生活〉の長いプロセスがあり、それらの事情を〈生涯〉の経験や記憶として、〈生〉を営んでいかざるをえない。死者と被災を悼み、常なる教訓としなければいけない東日本大震災は、私たちに〈生命〉〈生活〉〈生涯〉という〈生〉の諸側面を如実に感じさせ、考えさせるもの

なのでもある。



#### 4. 〈生〉の輝きということ

その昔、社会学の老教授と話していたとき、問わず語りに次のような話を聞いたことがある。「最近体が弱くなってきたせいかな、いい景色に出くわしたときなんか、これも最後かもしれないと思うと、よけいきれいに見えてきてね。」その言葉には、〈生〉を輝かせるものの解答のひとつが用意されている。それは、〈生〉の残り時間の自覚とも言えるし、〈死〉と言ってしまってもいい。〈死〉を意識することは、人や生きとし生けるもの、日々の出来事にていねいに向きあう態度を養うことにつながる。ホスピス医の山崎章郎氏も同様のことを語る。「朝起きて顔を洗う。一杯の水を飲む。家族と『おはよう』とあいさつする。限られている時間しか残されていないと自覚した時、そうした一つ一つの行為が、いとおしく、限りない意味の彩りを帯びてくる。」<sup>1)</sup>

私たちは身体をもつがゆえに、いつか〈生命〉を失い、〈死〉を運命づけられている。現代日本は長寿社会と評される時代でもあり、戦争はなく、貧しさで死ぬことも限られる中、〈死〉は遠い遠い老いの先にあり、老



いとともによってくるように感じられる。しかし、〈死〉はすべての人の隣に静かに横たわり、この瞬間も並走しているのである。事故死や災害死という形の突然死のあることが、それをしめしている。私たちは日々サーカスの綱渡りとして、〈生〉という1本のロープの上を歩いており、落ちて〈死〉を迎える可能性を、ゼロではなく瞬間瞬間かかえているのだが、ロープの上に広い絨毯が敷かれ、絨毯の下がロープであることに私たちは気づけなくなっているといえるのである。

〈生〉は〈死〉の身近さを感じることで、輝くとして、〈死〉を自覚すればするほど、未来への期待や将来への計画を持つことは難しくなる。それならば、〈死〉を介さずに私たちは〈生〉の輝きを感じる事が出来ないのだろうか。もちろん、ときどきであるならば、〈生〉の輝きに気づくことはできよう。しかし、その自覚を長く続けることはおそらくできないのであろう。なぜなら、〈生〉の輝きに気づいたとき、そのまぶしさに長くは耐えられないからである。それは、私たちが太陽を見続けることができないことに似ている。私たちに許されていることは、〈生〉の輝きにときに気づいたり、喜びや笑いという別な形を通じて〈生〉の生き活きさの一端を感じるようなのであろう。〈生〉は輝いているのだが、私たちは

日々その気づきに満たされては生きていけないのである。日々の〈生活〉を心臓のリズムのように繰り返しながら、〈生〉をまっとうすること、私たちにできるのはそのことなのである。

〈注〉

1) 『朝日新聞』2000年5月7日・朝刊

〈文献〉

藤村正之 2008 『〈生〉の社会学』東京大学出版会  
藤村正之編 2011 『いのちとライフコースの社会学』弘文堂

プロフィール.....  
ふじむら・まさゆき 上智大学総合人間科学部教授。  
1957年岩手県盛岡市生まれ。1986年筑波大学大学院  
社会科学研究所満期退学。博士（社会学）。東京都  
立大学助手、武蔵大学社会学部教授などを経て、現  
職。専門は福祉社会学、文化社会学、社会学方法論。  
主な著書に、『福祉国家の再編成』（東京大学出版会、  
1998年）、『〈生〉の社会学』（東京大学出版会、2008  
年）、『考えるヒント』（弘文堂、2014年）、『社会学』  
（共著）（有斐閣、2007年）など。